



大谷地でカラマツ苗の選別
(昭和30年 市川金政氏蔵)

下げ、増税し、政
府予算を縮小した
ので、国家財政は
再建の方向に進ん
だが、繭や米など
農産物価格は下落
し、小作農の増加
農地売却など農村
の困窮が広がった。

いわゆる「松方デフレ」である。官民共に植樹造林に
対する関心は失われ、二人の事業も厳しい状況を迎え

た。例えば、常盤村から四石五斗の種子の注文を受け、
一升の単価一円で貸売りましたが、翌年、代金の回収が
不可能になり、代償として、一年生幼苗を受け取り、
自村などに移植するということもあった。二人は事業
を広げていたこともあって、この不況に勝てず、カラ
マツ種苗業は挫折した。

●二人の後を継いだ人たちが苗を世界へ

不況が終息した一八八六（明治19）年、二人の後を
継いで協和村の上野喜之助、若い頃協和小学校の教員
であり、やがて川上村に戻った井出喜重らによって、
カラマツ苗の育苗と販路拡張が進められた。上野は一
八八七（明治20）年、岩手県遠野へカラマツ苗六〇万
本を出荷している。明治27〜28年ごろになると、北海

道・朝鮮方面へ、明治37年には樺太・満州へ、そして
第一次世界大戦後はヨーロッパにまで販路を広げてい
った。協和村では多くの農家が苗木生産などに関わる
ようになり、一九一九（大正8）年には協和村に「北
佐久林業種苗共同販売組合」が組織された。この組合
には、谷吉の息子松本卯八（後の協和村長）も加わっ
ていた。

谷吉・清吉の二人は、事業では挫折したが、全国で
初めて成功させたカラマツ育苗という技術は、やが
て日本各地、そして世界の山々に美しい緑をもたらし
たのであった。

●白秋の詩を生んだ松本・清水の技術

作家井出孫六は『新・千曲川のスケッチ』の中で次
のように記している。

「島崎藤村

が小諸義塾に
やってくるの

は明治三十二
（一八九九）

年のこと、六
年間の滞在中、

藤村は千曲川
の畔ほとりを歩い

てスケッチを



北原白秋「落葉松」の碑。詩は大正10年、
菊子夫人と星野温泉に滞在中つくられた
ものだという。（軽井沢町・星野温泉入口）

のこした。まだ彼の目からまつ林の美しさが入っ
てこなかったのは当然なことだ。千曲川流域、佐久地
方の風景が、からまつによって一変するまでにはいま
しばらくの時間が必要だった。（中略）

詩人北原白秋が義弟山本鼎のかかわっていた信州自
由画教育運動の夏期講習に招かれて、はじめて信州に
やってきたのは大正十（一九二一）年八月のことだ。
杳掛くろかけの星野温泉に泊まった九州・柳川生まれの詩人は
翌朝、これまで見たこともない美しい針葉樹の林がど
こまでもつづいているのを目にして心を動かされた。

からまつからまつの林を出でて、からまつからまつの林に入りぬ。
からまつからまつの林に入りて、また細くみちはつづけり。
その年の十一月、『明星』に白秋の『落葉松』は載
った。」

谷吉・清吉二人の作り出した新しい技術が、『落葉
松』という白秋の詩を生んだのだった。

（清水宣子・吉川徹）

参考文献

- 中村子之作『信州落葉松』文華堂印刷所
- 大井隆男『落葉松人工造林の創始と展開』（二〇一三）
- 『信濃』26巻2・3・5号
- 長野県『信州からまつ造林百年の歩み』
- 井出孫六『新・千曲川のスケッチ』郷土出版社

日本で初めてカラマツ育苗を成功させた

まつもと たにきち し みず せいきち

松本谷吉・清水清吉

(1836~1923年)

(1848~1902年)

荒れた山林に緑を取り戻そう、カラマツは成長も早く、建築・橋梁・坑木など用途も広い。農業と行商で暮らしていた二人は、この苗を生産して植林に役立てたいと考え、日本で初めて種子からのカラマツ育苗を成功させ、世界の緑化に大きく貢献した。

●火薬商で各地を歩いていた二人

現存するわが国最古のカラマツ人工林は、小諸藩が江戸時代嘉永年間(浅間山麓南ヶ原)で造林したものである。ただ、この時植林に用いた苗木は自生の山抜苗(やぬきまゐ)で、大きな面積での植林に応じることが出来なかった。大谷地村(現佐久市協和)の松本谷吉は一八三六(天保7)年生まれ、小平村(現佐久市協和)清水清吉は一八四八(嘉永元)年生まれだから、明治という時代を迎えた時、谷吉は三歳、清吉は二〇歳であった。二人は火薬の行商を生業として村々を回っていた

が、その商売は先細りであった。そこで彼らは新しい商いとして、荒れた山林にカラマツを植えるということに着目し、自生の山抜苗を火薬といっしょに売り歩いたところ、仕入れ値の二倍で売れた。しかし、山抜苗は数に限りがあり、計画的な需要に応えることができない。なんとか種子から苗を育てることは出来ないか。しかし、これは我が国において、今まで誰もやったことがない事業であった。

●カラマツの種子から育苗に成功

カラマツの母樹(天然落葉松(てんから))は、長野県を中心に本州中央高地に集中している。カラマツは実をたくさんつける年とほとんどつけない年があり、採種は難しかったのだが、一八七四(明治7)年は、蓼科山のカラマツが豊かに実をつけた。二人はその種子を集め、翌年にそれを畑に播いた。しかし育苗の方法もわからず、稗(ひえ)・粟(あわ)と同じように播いたので、発芽はしても枯れたものが多く、わずかな苗しかできなかった。

一八七六(明治9)年には、二通りの育苗を試みた。一つは苗代田のように肥料を施し、配水して乾かしてから種子を播いたが、これは失敗に終わった。もう一つの方法は畑に播いた。赤松の枝を挿して日除けをし、この方法で不完全ながら苗木を得ることができた。これが、育苗による苗木販売の記念すべき第一歩となった。翌年はまた種子が豊作だったので、二人は育苗方

法を伝授しながら種子を行商した。

一八七七(明治10)年に起きた西南の役の後、世の中は好況となり、植林に対する意欲も高まった。二人は南佐久郡川上村、諏訪郡泉野村(現茅野市)、浅間山麓などへ種子採種に出掛け、苗木養成は地元だけでなく、北安曇郡常盤村(現大町市)、東筑摩郡山形村、波田村・今井村(現松本市)まで事業を広げた。長野県もカラマツの有用性を認め、植林を奨励した。県庁の薦めを受けて植林に取り組んだ大沢村(現佐久市)は全国一の模範林と言われたが、これも二人の影響があったと記されている。

●松方デフレで育苗業は挫折



カラマツ苗の育苗 (右が一年生、左が二年生) 川上村

一八八二(明治15)年、大蔵卿松方正義(まつかたのまさよし)はインフレを抑えるため、緊縮財政を実施した。政府は資金調達のため、官営工場を民間に払い